

異世界授業トラック 5 「ようこそトリウイウムへ」

1 SE	場面切り替え
2 SE	鳥（スズメ／ムクドリ系）の鳴き声
3 一ノ瀬	トリウイウムの周囲を一望できる本校舎の屋上。学期が始まれば学生にも開放され、昼休みを「ノリで過ぐす生徒も多いらしい
4 一ノ瀬	手入れが行き届いた中庭や石造りの学生寮、音楽室のある旧校舎。四方を高い外壁（がい／き）に囲まれた学園は、どれも見たことがあるようなもので造られていたけれど、こうして見渡すと改めて僕の知っているそれとは違うのだと思い知られる
5 一ノ瀬	あの時引き返さなくてよかつた
6 一ノ瀬	外壁の外は深い森と山に覆われていて、延々と続く稜線には街の影すら窺えない。少し歩いたくらいじや人里（じり）なんか、山を下つね、山もできなさそうだ
7 みちる	「本当に良かったの？」
8 みちる	「タクが望むなら、たぶんもっと色々な知識が集まるといひで元の世界に戻る方法を探す」とだつてできるんだよ】
9 一ノ瀬	「王立アカデミー、だつけ」
10 みちる	「アカデミーだけじゃない。きっと王様だつてタクのノリを守ってくれるはずだよ」
11 一ノ瀬	「王様……か」
12 一ノ瀬	異世界研究が学問として認知されているくらいだから、僕と同じような境遇の人を探すことだってできなんかないのかもしれない
13 一ノ瀬	「トリウイウムに入るよ。弥彦先生の言うように、ノリの世界に慣れるまでじにいてもきっとできる」とは変わらないだらうから」

からすとうさぎ

異世界授業トラック 5 「ようこそトリヴィウムへ」

14	みちる	「タク……」
15	一ノ瀬	「そうだ。やつきのわつ一度見せてくれない?」
16	みちる	「やつきのひて、思念術?」
17	一ノ瀬	「うん。すゞいよね、何も使わずに離れていている人と会話でもわかるなんて」
18	SE	術力行使（弱）
19	一ノ瀬	ホログラム、とも違うみたいだけ……。「ディスプレイもないのにデバイスが投影されてる
20	みちる	「先生は今閉じてるみたい。他の誰かにつないでみる?」
21	一ノ瀬	「ううん、大丈夫。ありがとう。それは僕にも使えたりするのかな?」
22	みちる	「タクも? うーんどうかな。言葉は無意識に変換しているみたいだし、練習すればできるようになるかもしれないけど……」
23	みちる	「私達は小やこから使つててこのから当たり前に使つてているけど、やつひに来たばかりのタクはたとえ練習してもまだ難しいかもね」
24	一ノ瀬	「ひつして話しててのと同じよつに意思疎通できるひつじよ。」
25	みちる	「完全に無意識というわけにはいかないけれどね。大体それで合口してるかな」
26	一ノ瀬	「想像もつかないけど、なんだかすゞいのは分かる気がするよ」
27	みちる	「私達からすれば術式もなしにレッドデータが読める方がすゞいと思つけどな」
28	一ノ瀬	「レッド、データ?」

からすとうさぎ

異世界授業トラック 5 「ようこそトリウイウムへ」

29

みちる

「あ、そつか。ええとレッドデータっていうのはタク達の世界の文化を示すもののこと、かな。厳密に言うとわりと多いと広い意味が含まれるらしいんだけど、とりあえず今はそんな感じ」

3

30

一ノ瀬

「——僕が知っていることはない」ではそうなるんだね。
どうしてかは上手く説明できないんだけど、みちるや弥彦先生の言つていることが嘘じやないってことはなんとなく分かるんだ。本当に驚きしかないけれど」

31

一ノ瀬

「そういうえば、弥彦先生は最初から僕がこの世界の人間じやないつて分かっていたのかな？」

32

みちる

「あの夜のタクを見ればなんとなく普通じやないつていうのは分かる気はするけど——たしかにおじさんなんそうでなくとも気づいたかもしれない」

33

一ノ瀬

「みちるもそうだつた、か？」

34

みちる

「推測だけどね。そのことはあんまり話してくれないから」

35

みちる

「まだ小さかったからか、自分のことなんだけどほとんど覚えてないんだ」

36

みちる

「トリウイウムに入る時かな。おじさんから今のタクみたいな話をされたのは」

37

一ノ瀬

「辛くなかった？」

38

みちる

「よく分からなかつたつていうのが正直なところかな。おじさんも、街で面倒を見てくれた人達もみんな優しかつたし——ちょっと過保護といふか、いつまでも子供扱いしてくるのはどうかと思うけど」

「でも、とても私の周りはいつも温かつたから、『いいにいぬ』とに何の疑問も感じなかつた」

39

みちる

異世界授業トラック 5 「ようこそトリヴィウムへ」

40	みちる	「だから……だからね、タクが私と同じようにこの世界のことを想つて くれるように、安心して自分を探せぬように力になりたい」
41	みちる	「最初におじさんからタクの話を聞いた時、そう思つたんだ」
42	一ノ瀬	「ありがとうございます。正直、不安が無いわけじやない。それでも、みちるや弥彦 先生がそう言つて改めて思つよ」
43	一ノ瀬	「当たり前だと思っていたものが当たり前じやない世界。 どいまで、何ができるのか分からぬいけど
44	一ノ瀬	「僕もいの世界のことが知りたい。 みちるや弥彦先生が力を貸してくれるなら、頑張れる気がするから」
45	みちる	「タク……。うんっ。大船に乗つたつもりで任せてほしいかな」
46	SE	歩行/硬速
47	みちる	「あ、シズリルだ。里に帰つて言つてたのにもう戻つて来たんだ」
48	一ノ瀬	「しおりる？」
49	みちる	「同じクラスの子だよ。ほら、あそ」。
50	一ノ瀬	タクがいた三門（さんもん）、外門坂（がいもんざか）の方
51	みちる	「道が……。あそ」だけ斜面が少し緩やかになつていたのか……。 ——あの子飛んでない？　ほうき？　に乗つてる……？」
52	一ノ瀬	「シズリルは魔女の家系だから、いつもあんな感じかな。 あ、ほらもうすぐ着きそう。迎えにいかなくちゃ」
53	みちる	「ま、じょ……。なんか急に自信が無くなつてきましたよ……」 「行こう、タクも一緒に」
54	一ノ瀬	「あ、ちょいとみちる……」

異世界授業トラック 5 「ようこそトリウイウムへ」

55	SE	歩行/硬速
56	SE	駆け足系/再生停止まで
58	SE	再生停止
59	みちる	「ほふ、タクも」
60	一ノ瀬	「僕も？ いきなり過ぎない？」
61	みちる	「大丈夫だからっ。」
62	一ノ瀬	「あれに？！ 固定とか全然されてなさそうだし、あんなスピードで飛んだら落ちたりするんじゃ……」
63	みちる	「たしかに私も一回落ちた」とあるけど、この辺りは森も多いし高い木がクッショニ�になつてくれるからきっと大丈夫かな」
64	一ノ瀬	「それは下手すると死ぬんじゃ……。謹んで辞退します」
65	みちる	「ふふん、私も久しぶりに乗りたかったんだーシズリルのほうき」
66	一ノ瀬	「聞いてないし……本当に嬉しそうにしてる……」
67	一ノ瀬	「魔女……あの子が……」
68	一ノ瀬	異世界。トリウイウム。まだ全然実感は湧かないけれど、不思議と不安よりも期待の方が大きいのはどうしてだらう

からすとうさぎ

異世界授業トラック 5 「ようこそトリヴィウムへ」

69

みちる

//回想（トラック 2 No.119）

「何を知っていて、何を知らないか。
トリヴィウムはそれを探すにはきっと一番だよ」

70

みちる

//回想（トラック 2 No.120）

「キミが探すその道がスリにあるのか、私も一緒に探すから。だから——」

71
一ノ瀬

でもそれでいいのかもしれない。

たとえ今は流されるだけであっても

72
みちる

「ねえ、タク——」

73
みちる

「よひつ」やトリヴィウムへ」

74	BGM	END 曲
----	-----	-------